

○学級の歴史（小泉先生）

・今年クラス、児童（A）の背景

クラスには、前年度のクラスの中での出来事をきっかけに登校がしづらくなり、放課後に教室で学習に取り組んできた経緯のある児童（A）がいる。

その児童は去年の6月半ばに、悪ふざけで始まったからかいの事象により、嫌な思いをしていた。保護者は学校に対してていねいに願いや思いを伝えようとされるが、なかなかうまくかみ合わない部分があったようだ。担任がトラブル発生時に、子ども本人や保護者とのいい関係を構築しきれていない状態だったために別の教員が関わるようになっていた。そして今年、そのAがいるクラスを受け持つことになった。

・クラス分け

新年度のクラス分けの時に、合計10回の回数で児童の名前を呼ぶという形でクラス分け発表を行った。子どもが経験したことのないようなことでドキドキワクワクするような方法はないかという思いをもって学年担任集団で考えた方法だった。

靴箱を決める時には、消しゴムを自分の使いたい靴箱の中に置き、希望する場所が重複したら、調整をしようということを行なった。結果的には誰一人重複することがなかったのだが、まわりの様子を気にかけながら、自分の希望だけを最優先するのではなく全体としてうまく調整できることを考える児童が多いのかなという印象を持った。

教室のロッカーを決める時には、同じように筆箱使って行った。その時、Aとある男の子が希望するロッカーが重複した。望ましい対応ができるようにとAの様子をうかがっていたので、2人に「じゃんけんしたら？」と声かけしたところAが「わたし、じゃあいいわ」ということで自分から別のロッカーに移動させてくれた。Aに本当に希望を譲ってもいいのか確認してから「気持ちよく譲ってくれたおかげでみんなが満足のいく形で決められたね」と褒めることができ、同時に1人の児童が「わーすごい」と自然な形で拍手をはじめそれがクラスに広がった。

Aにとって、先生が認めたこととクラスの仲間が認めてくれたことで、希望通りにはならなかったけれども、自分なりに納得のいく形になったのだろうということを保護者との連絡の中で確認することができた。

・放送委員会決め

放送委員会に10人希望がでた。その中にAがいた。全然決まらない。「どのように決めようと思ってたん」と子どもたちに聞いたら、A自身、自分が1番放送委員会になりたい気持ちが強いと思って、「1人1人自分の思いを語るように」ということを提案していた。実際その方法でやって

みると、全員がしっかりと自分の思いを語り、強い思いを持って立候補しているのだということがわかり、困ったなど悩んでいた。最終的に男女半分ずつじゃんけんで決めることになった。結果的にAはじゃんけんに負けてしまったが、第2希望の委員会には入ることができた。Aがやりたかった放送委員会に入れず、不満を持つかなと思っていたが、色んな話し合いをして、先生がカバーをしてくれたのもあり、本人は納得していたようだった。

自分の意見を出せた結果、希望通りにならなかったというのが本人の中では納得のいく形になったのではないかと、これを保護者との連絡の中で確認することができた。

・学年目標決め

学年目標を子どもたちに自分たちの言葉になおしてもらうために、「主体性、協働性、多様性を受け入れる」というのをそれぞれ考えもらうために、アクティビティを取り入れて行った。「星を全員で作りましょう」という協働性を教えるアクティビティは子ども一人ひとりが、自然な形で声をかけ合って、一つの目標に向かってかかわり合いを深められたということができてよかった。子どもたちは自分たちの言葉で、「もちあじ、チャレンジ、チームワーク」という目標をつくった。

・班づくり

班をどのように決めるか子どもたちと話し合いを行った。みんな一生懸命考え、いろいろ意見が出たが最終的にはくじ引きになった。クラスの子どもたちは初め、手が全然上がらなかったから、班で全員手を挙げていたら正の字を書いていって数えるという形で手が上がるように促していった。

子どもたちに「学習」という言葉の意味を考えさせた。「習」と意味は？熟語は？「学」は何？みんなの意見を聞きながらやることや、どうやってやるのがいい…机を班の形にくっつけることで、友だちといっしょに活動していける、ということが子どもの言葉として出されてくる。そのように徹底的に子どもたちと一緒に考えていくことを意識して進めていった。

安心というのを班のメンバーでつくろうとしたらあかん、どんなメンバーでも安心できるように、言葉かけなどしなあかんわ。

○嶋田先生：「ある小学校では、くじ引きさせといて、子どもが帰った後、真剣に班を変えていたということがあった」

なんのために班をつくるのかというのをいうと、もめごとが起こったり、問題が起こったりした時にどう乗り越えていくのかというのを学ぶのではないですか。

こっちが逆にうまくいかないと思っているのは、教師の力量のなさ。

○中原先生：中学校では、班長をつのって、班長会議であの子はしんどいからこの子と一緒にのほうが

いいんちゃうとか。班長メンバーが固定化していくと任せっきりになったりするので、全員が班長をできるように班編成替えを繰り返していた学年もあった。

そのたびにもめて、出会い直してというのを繰り返していった。

○小泉先生：班の中で役割が固定化することへの対策としての1人1役制。年度当初に誰もが自分の役割をきめる。

まだ活躍していない子どもを、活躍できるような授業、行事を教師がつくっていかないと。

例えば遠足などで、子どもが声を出して列を並べるのは、教師の下請けをさせてるいただけやし、そのことをできない子どもがいるから取り組みたい方向ではない。

システムだけ伝えておいて、ちょっとした声かけしているとかを評価する。

教師が求めているのを子どもにやらせる時に、声かけしているとか、勉強教えているとか、教師の求めているものをリーダーにすると、できない子がでてくる。

そしてどんどん班長をしたい子どもが減っていく。そりゃあ教師の下請けのような大変なことは、したくない。

○五十里先生：あの子は悪いことはせんし、運動もできるしという子どもが残っていく。先生が見ていない。学習集団づくりはリーダーをつくってそのことやっていくというのではない。

教師の都合のいい班にならないように。

○嶋田先生：まなざしの種類が違う。

「教えて」といっている、自分の権利を大切にすることを褒めるのか、教えている子どもを褒めるのか全然違う。

わからんと言えるクラスをつくられているのか。わかりませんとひとり言った時に、みんなもわからんかなと聞いたらみんなわかりませんという。なら最初にいった子を評価する。ジェスチャー、トーン、動きで説明できる子などさまざま、評価する。

○小泉先生：あの子の説明上手やったねというのを評価するのではなく、誰のおかげで説明できたんや。それは、わかりませんといった子がいたから、わかる子が刺激されたから。